

# 大学ICT推進協議会 (AXIES) 2023年度年次大会を終えて

## Post Conference Report on AXIES 2023 Annual Meeting

AXIES 2023 年度 年次大会大会長・名古屋大学大学情報学研究所教授・名古屋大学情報基盤センター長 森 健策

General Chair of AXIES 2023 Annual Meeting, Professor of Nagoya University, Kensaku Mori

ORCID ID : <https://orcid.org/0000-0001-7853-9370>

## 1.はじめに

去る 2023 年 12 月 13 日から 15 日、名古屋国際会議場にて関係諸氏の絶大なるご協力の下、無事に大学 ICT 推進協議会 (AXIES) 年次大会を開催することができた。まずは、本稿の冒頭において、特別講演を行ってくださった先生方、参加者の皆様、企業展示の皆様、プログラム委員会、実行委員会の皆様、アルバイトの学生さん、AXIES 事務局の皆様など、様々な方々に厚く御礼を申し上げたい。幸いにも 1300 名を超える数多くの方にご参加いただき、一時は当初用意したカンファレンスバッグが足りなくなるのではないかなどの心配をしながら、大会運営を続けた 3 日間であった。新型コロナウイルス感染症の位置づけが「新型インフルエンザ等感染症 (2 類相当)」から「5 類相当」へと変更されて初めての年次大会であり、数多くの方々にご参加いただけた大会となったかと思う。大会長である私の不手際によって、数多くの参加者、関係者の方々にご迷惑をおかけしたかもしれないが、まずご容赦いただければ幸いである。

さて、本大会は、実行委員会における議論において、そのテーマ名を「新たな時代における大学デジタル基盤の新潮流」と設定し、生成 AI などや研究データ基盤などの新潮流が、大学における教育研究においてどのような影響を与えるかを議論できるような場となる大会と捉えた。英文テーマ名は「AI Empowering Bright Academia」としており、和文テーマ名にはない AI の 2 文字が含まれている。現時点では、生成 AI の利活用において、様々な議論がなされているが、今後は積極的に取り扱われてゆくものと考え。そして、そのためにはデータの利活用も極めて重要となるであろう。このような新潮流を大会の参加者と議論ができる場を提供したく、今回の大会の企画と運営を進めるに至った。

本稿では、AXIES2023 年度年次大会を振り返り、今後の方向性などについて議論したいと思う。

## 2.大会プログラム

### 2.1 概要

本大会は、基調講演 2 件、22 件の企画セッション、111 件の一般講演、102 社 (大学、公的機関等 9 機関を含む) の展示セッションから構成されるプログラムとなった。どの講演会場も非常に盛況であり、一部の会場においては立ち見が出るほどであった (会場収容定員の都合、椅子の最大設置数の上限もあった)。立ち見となった参加者の方には深くお詫び申し上げる次第である。

### 2.2 基調講演

全体会における基調講演においては、名古屋大学大学院情報学研究所の武田浩一先生に「生成系言語モデルと教育応用」と題して、生成 AI と高等教育に関するご講演を (図 1)、米国 EDUCAUSE (米国の高等教育レベルの ICT 推進機関) の Susan Grajek 先生には「Higher Education's Digital Transformation in 2024: What You Need to Know」と題して、大学 ICT を活用した大学 DX における我々が知るべきことについてのご講演を (図 2) それぞれいただいた。

武田浩一先生のご講演は、大学における教育研究に対して、生成 AI がもたらす影響は何であるかを解説していただくものであった。特にデータ駆動型研究から AI 駆動型研究へといたる道筋が見えてきた現在、我々大学 ICT に関わる者が、AI 駆動型大学の実現に向けて何を



図 1 武田浩一先生の基調講演の様子

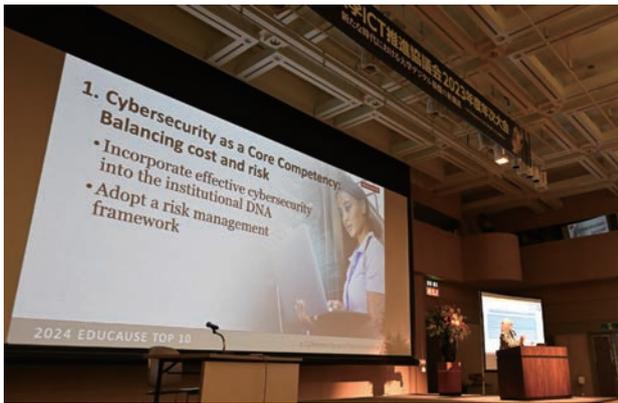


図2 Susan Grajek 先生の基調講演の様子

すべきかを問うご講演であったと思う。言語を中心とした生成 AI モデルの潮流や仕組みについてもわかりやすく解説いただいた。生成 AI に代表される AI 技術は、近い将来大学の組織、教育、研究を大きく変える技術となり得る。これまでの学修法、研究方法、評価法ががらりと変わることは間違いないと思う。今後のあり方について熟考する良い機会となったと考える。

Susan Grajek 先生のご講演も、同様に大学 ICT の企画、設計、運用において、私たちが知っておかなければならない事項、そして、米国の大学における事情についてご講演いただいた。EDUCAUSE Top 10 は、その年々の大学 ICT に関する 10 の重要な事項を EDUCAUSE がとりまとめたものである。米国の大学の CIO を含む経営陣にアンケート調査を行い、その結果を EDUCAUSE 側でとりまとめ、毎年 Top10 を決定している。今回の Top 10 は、#1. Cybersecurity as a Core Competency, #2. Driving to Better Decisions, #3. The Enrollment Crisis, #4. Diving Deep into Data, #5. Administrative Cost Reduction, #6. Meeting Students Where They Are, #7. Hiring Resilience, #8. Financial Keys to the Future, #9. Balancing Budgets, #10. Adapting to the Future であった。さらに、講演においては、番外編として生成 AI も取り上げられ、ミシガン大学における生成 AI サービスを行うセンターなどが紹介された。

どちらの基調講演もまさに「新たな時代における大学デジタル基盤の新潮流 -AI Empowering Bright Academia」について考える機会を与えるものであったと思う。

### 2.3 企画セッションと一般講演

AXIES の特徴は、AXIES に設置された部会が、大会において企画セッションを構成し、その時々話題についてのエキスパートをお呼びして講演を行っていただくことにある。冒頭でも述べたように、大学 ICT の新た

な潮流は、生成 AI の教育研究、そして、大学経営や業務における利活用である。これは、本大会のテーマでもある。例えば、教育技術開発部会による企画セッションでは、「生成系 AI を教育に活かすには」と題して、生成 AI の教育における利活用事例が紹介されていた。また、CIO 部会によるセッションでは、EDUCAUSE の Susan Grajek 先生による「One Year After the Stunning ChatGPT: The Future of AI Utilization in Higher Education」と題して、ChatGPT に代表される生成 AI の高等教育における利活用に関して議論がされていた。他にも、「生成 AI を活用した教材開発 - 個別最適化教材と OER」, 「今後の AI 開発・活用におけるハイブリッドクラウドプラットフォームのあり方について」, 「セキュリティはどこに行くのか? 生成系 AI・ゼロトラスト時代のセキュリティと関連技術の最新動向」, など数多くの AI に関連した企画セッションがあったことは特筆されよう。

研究データマネジメント、あるいは、研究データ基盤も、大学 ICT において重要事項である。本大会においても、研究データマネジメント部会による「AI・クラウド時代において ICT 管理者・利用者の負担軽減を可能とする研究データ管理」 「RDM 推進のための学内体制を考える: ポリシー策定・DMP 作成・研究データ公開・グリーン OA 等に関わる学術支援」 など研究データに関する数多くの企画セッションがあった。AI を活用した大学 ICT を考える上で、データは欠かせない存在である。データが大学の重要な資産となる現在、データの利活用法を議論することは大切である。研究データの利活用についての議論は、既存の学会では取り上げることが難しい場合も多く、教員、研究者、大学経営者、事務職員、技術職員、企業など様々な所属の方が参加する AXIES は大変貴重な議論の場であるとも言えよう。

一般講演も、口頭発表、ポスター発表併せて活発な議論が行われた。どの講演も、大学 ICT の企画、設計、導入、運用に関する日々の活動の中で発見された様々な課題を、どのように解決しようとしたのかがわかる、非常に素晴らしい発表であったと感じる。理論だけではなく、実際の活動に基づいた発表であるため、非常にインパクトがあった。発表者の職種も多岐にわたり、これが AXIES の多様性を生み出しているものと考えている。

### 2.4 企業展示・出展者セミナー・ランチョンセミナー

102 社にわたる企業展示がなされたことも特筆されよう。数多くの大学 ICT に関するソリューションが展示され、興味を持つ製品が数多く展示されていた。加えて、同会場では大学等の教育研究機関からの展示もあり、大

学 ICT に関する日頃の活動も紹介されていた。

企業セミナー、ランチョンセミナーも開催され、数多くの興味深い話題が提供され、大いに賑わっていた。

### 2.5 情報交換会

本大会 2 日目の夜には情報交換会が催され、大会参加者間の情報交換がなされた。会場では、企業展示ブースも設置され、大会参加者と展示者との間で、展示会場とは異なるリラックスした雰囲気でのやりとりがなされていた。

## 3. おわりに

本大会は AI / データが一つの焦点となった会議であった。名古屋国際会議場での開催であり、休憩スペースも数多くあったことから、会議場の様々な場所で参加者同士の議論・歓談が行われていた。対面で大会を開催する一つの意義は、予期しない出会いを提供し、会話・議論を促進することにあると思う。現状、このことはバーチャル空間では難しく、フル対面での会議を開いた価値があったと思う。大会運営においては、ネットワークの不調など数多くの不手際があったことを深くお詫びしたい。

2024 年は、京都大学が担当校となり、初めて奈良で開催される。今も続く生成 AI の技術革新が大学 ICT に与える影響をさらに深く知ることができる場として、AXIES 大会に参加できることを楽しみにしている。

## 謝辞

AXIES2023 年度年次大会の開催にあたりご尽力いただいたすべての皆様に感謝いたします。

### 【著者略歴】



### 森 健策

1992 年名古屋大学・工学部・電子工学科卒。1996 年同大学院工学研究科情報工学専攻博士課程後期課程修了。博士（工学）日本学術振興会特別研究員。名古屋大学大学院工学

研究科助手、同大講師、同大難処理人工物研究センター助教授、大学院情報科学研究科助教授、同准教授、同大情報連携統括本部情報戦略室教授を経て 2017 年より名古屋大学大学院情報学研究科教授、名古屋大学情報基盤センター長、名古屋大学情報連携統括本部副本部長、国立大学法人東海国立大学機構情報連携統括本部情報戦略室長、国立情報学研究所医療ビッグデータ研究センターセンター長を兼務、2001 年より 2002 年まで米国スタンフォード大学客員助教授。主に、画像処理とコンピュータグラフィックスの医用画像への応用に関する研究に従事。文部科学大臣表彰若手科学者賞、日本コンピュータ外科学会日立メディコ賞、日本医用画像工学会奨励賞、日本エム・イー学会論文賞・坂本賞、丹羽記念賞、電子情報通信学会情報システムソサイエティソサイエティ論文賞、日本気管支学会優秀演題賞、日本コンピュータ外科学会講演論文賞、RSNA Magna Cum Laude、各賞受賞。電子情報通信学会フェロー、日本コンピュータ外科学会、日本呼吸器内視鏡学会、日本消化器内視鏡学会、情報処理学会各会員。IEEE Member, SPIE Member, MICCAI Fellow, 国際コンピュータ外科学会理事長、日本コンピュータ外科学会副理事長。